

第1回

千葉氏サミット

●基調講演

テーマ「東アジア世界・列島社会の中の千葉氏」

■講師 野口 実 先生

(京都女子大学名誉教授、同大学宗教・文化研究所客員研究員)

■平成28年8月21日(日)

■三井ガーデンホテル千葉

東アジア・列島社会の中の千葉氏

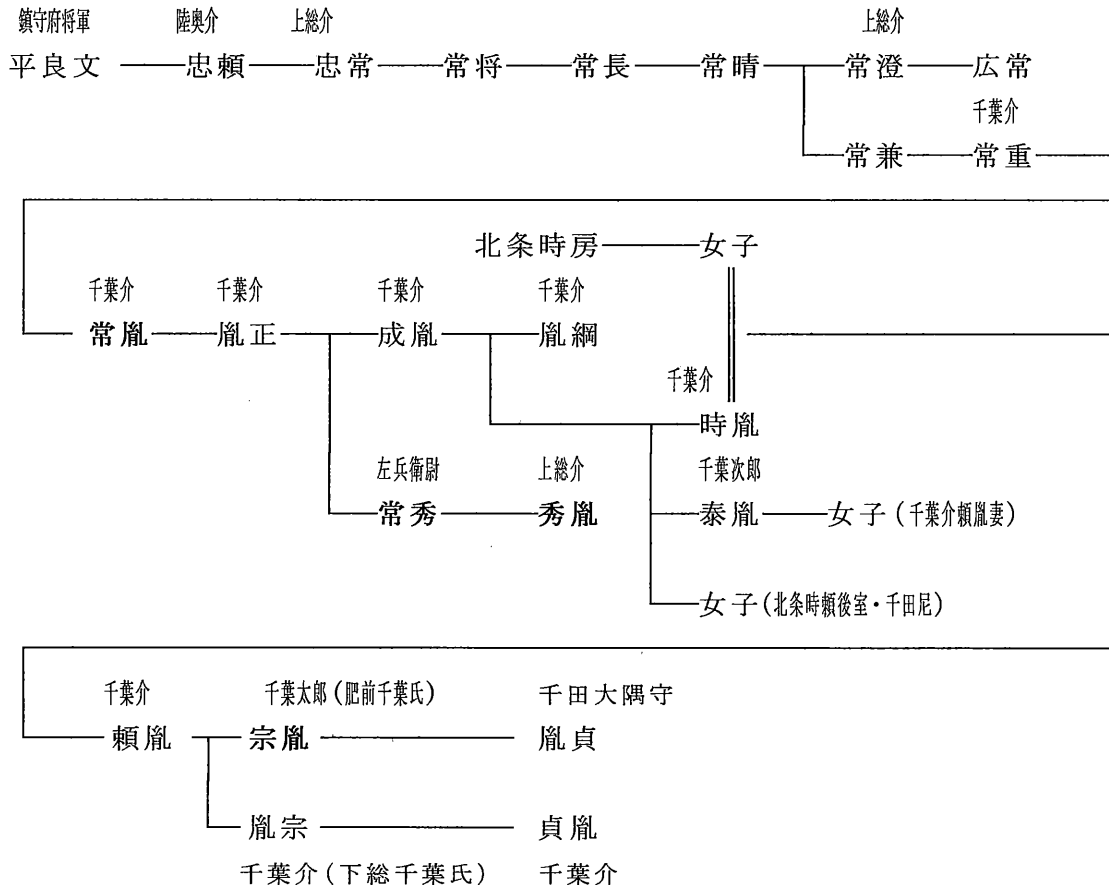
野口 実

1 千葉氏の成立と展開～平安・鎌倉時代～

(1) 千葉氏とは

桓武平氏良文流（坂東平氏）のなかの忠常流（両総平氏）から
 下総国千葉郡千葉郷（都川水系）→千葉庄を名字地として成立した「家」
 下総権介職（除目補任か在国司職か？）を相伝→「千葉介」＝下総守護家
 両総平氏族長上総（上総権介）広常の滅亡（1183） 上総千葉氏秀胤の滅亡（1247）
 →鎌倉幕府の御家人制下で一族の惣領となる
 両総平氏→千葉氏一族 「千葉介」＝嫡宗家
 その後、分裂 中世末には三つの千葉介家が存在（下総・武蔵・肥前）

千葉氏系図（鍋島文庫本『諸家系図 全』・『神代本千葉系図』等による）



(2) 千葉氏の一族

幕府成立以前に分立した両総平氏系 上総氏が族長的存在→千葉氏一族化 a

常胤の庶子の子孫たち→後に「千葉六党」と呼ばれる b

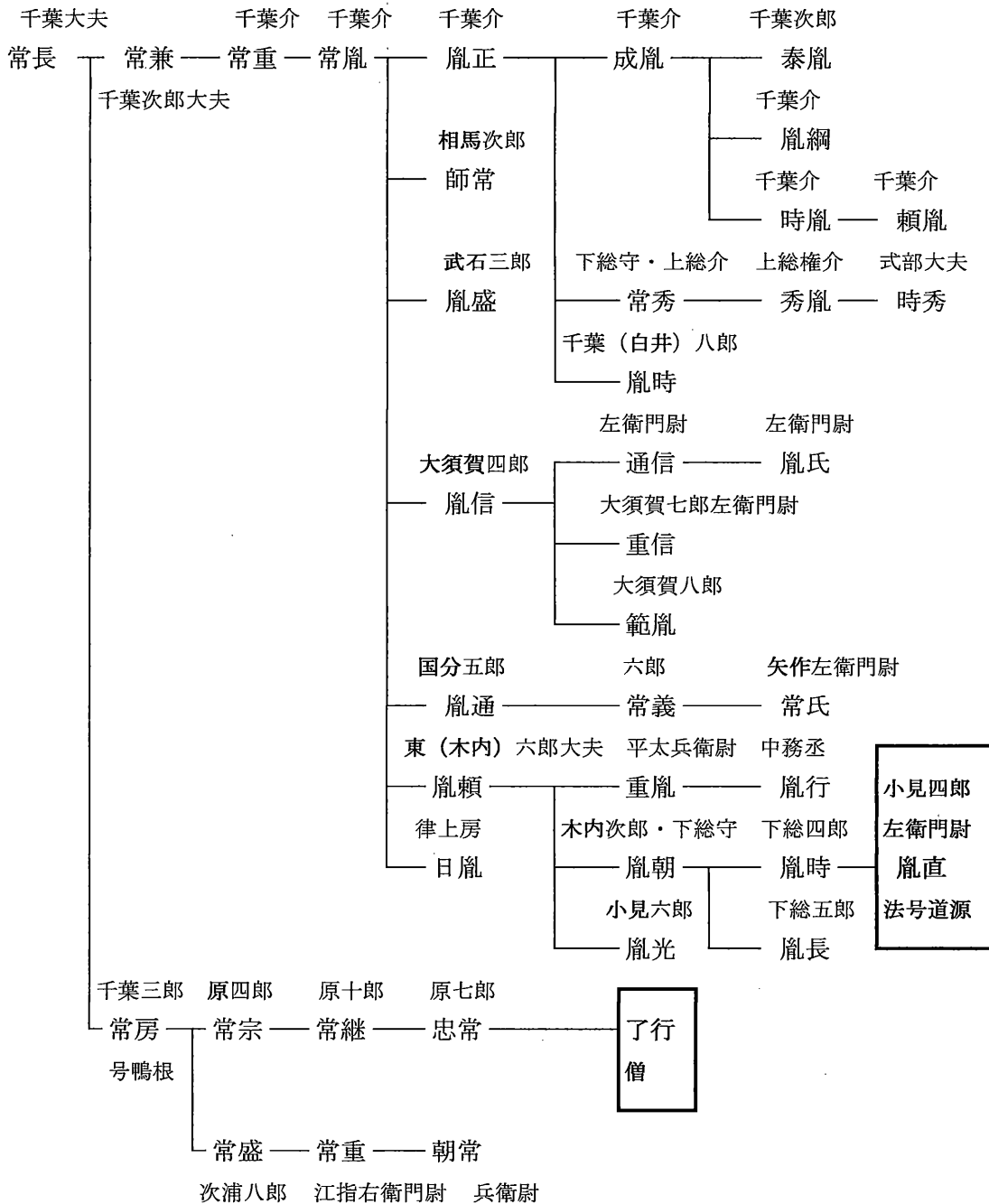
いずれも列島各地に展開 a → 椎名 伊北 など

b → 相馬 武石 大須賀 国分 東 (→木内)

白井など

両総平氏の通字 「常」 ⇒ 千葉氏の通字 「胤」

<千葉氏とその一族>



(中条家文書「桓武平氏諸流系図」・『神代本千葉系図』・『千葉大系図』等による)

2 治承～文治内乱による所領獲得 (1180～89)

(1) 源頼朝の房総上陸

治承4年(1180)8月、源頼朝が、平家打倒の挙兵→有力武士団に参向を促す

9月13日、千葉成胤(常胤の孫)と胤頼(六男) 下総目代の館を急襲→主体的反乱

(2) 千葉庄結城浜の合戦

千田(藤原)親政(平家姻戚) 千葉庄の堀の内(千葉市中央区)を襲撃

→親政敗退(妙見の示現譚)

☆ 約半世紀にわたる下総藤原氏による千葉氏に対する圧迫に終止符を打つ

9月17日 常胤、下総国衙に頼朝を迎える=国衙掌握を示す 千田庄・相馬御厨など

(3) 上総広常の肅清

頼朝：寿永2年(1183)12月 上総広常を肅清→遺領の大半は千葉常胤と和田義盛に
常胤→両総平氏の族長の地位を確立

文治元年(1185)正月 源範頼の軍に属して鎮西(九州)へ

同年3月、壇ノ浦合戦で平家が滅亡した後には九州に留まって戦後処理

(4) 木曾義仲・平家の追討

文治元年(1185)正月 源範頼の軍に属して鎮西(九州)へ→戦後処理(鎮西守護人)

<鎮西の千葉氏所領>

豊前国上毛郡成恒名(福岡県築上郡上毛町)、肥前国小城郡(佐賀県小城市)、
薩摩国島津庄寄郡五箇郡・国内没官御領四一一町(鹿児島県薩摩川内市など)、
大隅国菱刈郡入山村(伊佐市菱刈)

豊前・薩摩・大隅の所領→常秀 肥前小城郡は千葉介家に伝領

(5) 常胤が京都の治安維持にあたる

文治3年(1187)8月 常胤、下河辺行平と上洛し、京都の治安維持にあたる

「彼の兩人上洛以後は、洛中以の外静謐なり」(権中納言藤原経房)

(6) 奥州合戦

文治5年(1189)奥州合戦 常陸守護の八田知家とともに東海道大將軍として出陣

勲功賞を最前に拝領：常胤やその子息たちの獲得した所領

→陸奥国好島庄(福島県いわき市)・行方郡(南相馬市周辺)・亘理郡(宮城県亘理町)・高城保(宮城県松島町周辺)など陸奥国の太平洋岸の一帯に分布

下総の一在地領主千葉常胤→北は陸奥、南は薩摩にいたる大領主へ

(7) 御家人の筆頭

鎌倉幕府の恒例の歳首椀飯(年頭に有力御家人が將軍に祝膳を供する儀式)

頼朝在世中は常に常胤が元日につとめる

建久元年（1190）10月、頼朝の上洛に従い、常の如く後陣
常秀は祖父の譲りを得て左兵衛尉に

同5年6月、東大寺戒壇院の造営を命じられる

建仁元年（1204）3月24日、常胤は84歳で没。

※ 千葉氏一族は、その後、承久の乱などで西国に多くの所領獲得→各地に展開

千葉介家→伊賀国守護職

東氏→美濃国山田庄 など

美濃に遷り住んだ東氏は、千葉氏一族の守護神である妙見を勧請

郡上市大和町の明建神社。「七日（なぬかび）祭」←千葉氏の妙見信仰の様態が継承されているという。

3 鎌倉時代の千葉氏と京都

(1) 幕府成立以前における京都権門との関係

八条院（暲子内親王＝後白河院の妹）領千葉庄を本拠

右大臣徳大寺公能←常胤

上西門院（統子内親王＝後白河院の姉）←胤頼（常胤子息） 叙爵（六郎大夫）

三井寺 ←律上房日胤（常胤子息） 以仁王の挙兵に参加して討死

常秀（常胤孫）：在京経験→九州まで転戦（「一所傍輩のネットワーク」）1190 任兵衛尉

(2) 京都大番役と千葉氏

千葉氏の宿所・屋地はどこか？ 13C大宮 14C四条堀川・四条油小路？ 清水坂
下総・伊賀守護、本籍は「鎌倉中」→大番役勤仕

(3) 西国所領の経営基地としての京都

i 西国所領における訴訟の審理 千葉介上洛中

ii 有力貴族西園寺家に貢馬

iii 常駐の吏僚の活動 内裏・蓮華王院・若宮八幡宮造営などの差配

駐京都事務機関・代官の存在

吏僚のスカウト（因幡出身の富木常忍など？）

iv 胤頼子孫の木内氏が大和国に所領を獲得するなど一族の西国進出顕著

v 千葉介による闘乱事件の記録も

4 千葉氏一族出身僧（了行・道源）の渡宋・渡元

(1) 了行に関する知見

千葉氏一族の原氏出身の僧 下総国千葉寺で修行 千葉氏を介して九条家（摂関家）に仕え、
1234年から1240年の七・八年間の一時期渡宋して、九条家出身の慶政との繋がり「宋版一切経」の補刻

嘉禎二年（1236）、一切経・「観音玄義科」などを請来。僧位は法印 九条堂住僧

千葉氏の閑院内裏西対造営に参画（「中山法華経寺日蓮遺文紙背文書」）

建長の政変（前將軍九条頼経派によるクーデター計画）の首謀者として矢作左衛門尉（千葉氏一族）らとともに逮捕される（建長3年〈1251〉12月）。

① 了行の渡宋

仏典「観音玄義科」の発見 滋賀県愛荘町金剛輪寺

- ◇ 中国天台宗の開祖、天台大師智顛の著「観音玄義」を南宋期の僧が要約、標語にして線で結び、智顛思想の論理構造を表したもの

奥書によって了行上人が持ち帰り、五条大宮近くで書写したことがわかる

（書写奥書）嘉禎三年丁酉七月二日、於東洛楊梅大宮一条弘通法家／十一面觀世音菩薩御宿房書写了、／此科前代未度也、為了行上人渡唐之時求得此科本、帰朝之／次将来 時于嘉禎二年丙申夏」

嘉禎二年(1236)に入宋僧の了行が初めてわが国に将来

② 閑院内裏造営の造営と了行

指図法師＝了行？

『岡屋関白記』建長元年(1249)四月二十一日条

又曰、閑院被造営者、差図可被仰誰人哉、先度承元造営之時、松殿（基房）可承之由時人存之、先例有職人承之故也、近則法性寺殿（忠通）令承之給、或時者雅頼卿（源雅頼）承之、余（兼経）答云、今度事未承、承元誰人承之哉、禅閣（道家）咲云、預法師于時称指図房、件法師示合或者奉仕之、仍於公事無便宜、今度尤可被引直敷、

※ 撰政近衛兼経（1247～1252）妻は道家女・仁子

承元期の関白は近衛家実（1206－1221）

承元2（1208）12. 27 閑院皇居災す

建暦2（1212）7. 27 閑院内裏造営事始

建保1（1213）2. 12 新造閑院内裏で安鎮法を修す

(2) 道源とその周辺

千葉氏一族木内（小見）氏の出身で鹿島神宮寺の浄行僧となっていた道源（道眼）が西園寺家の助力を得て渡元して経典を請来し、六波羅に那蘭陀寺を開く

道源は『徒然草』の作者兼好法師と親交があった

- i 了行以外にも大陸に渡り経典を将来した千葉氏関係者が存在した
森末義彰氏の論文「將軍地蔵考」（『美術研究』91,1939）

西園寺実兼（1249-1322）鹿島浄行千葉道源を渡宋させる

公経－実氏－公相－実兼－公衡

「釈尊影響仁王経秘法」奥書（『大日本仏教全書』有精堂出版、1934）

此釈尊影響仁王経秘法ハ日本ニ予カ外ニハ上古ニモ無知大師先徳。其故予養父西園寺太政大臣実兼投三千五両※ノ金ヲ。鹿島浄行千葉道源為遣唐使遣異朝。異朝天子大元王萬臣將軍為勅使。打開国清寺大蔵。隋煬帝勅封切解釈尊影響告勅秘録七二卷御書送本朝。希代勝事。（中略）亀山院第二跡前天台座主無品親王良助筆下

※「與願金剛地蔵菩薩秘記」巻首の記述・「法華輝臨遊風談奥書」から三千五百両の誤り

ii 千葉道源の出自

鹿島神宮寺の浄行僧 千葉氏一族

① 鹿島神宮と関係深い在地勢力（常陸平氏）と千葉氏の婚姻関係

② 元応元年十二月二十六日「淡路由良莊雜掌地頭和与状」（鎌遺 27347）

同 二十七日「関東下知状」（鎌遺 27348）

淡路国由良庄の地頭職得分を領家の禅林寺に請け負わせる事で和解

→地頭「木内下総四郎左衛門入道道源」

③ 『千葉大系図』『木内系譜』→「法号道源」（小見四郎左衛門尉胤直）

「道」の字が木内氏の法号に使われることが多い

木内胤朝の孫 胤朝は下総守 承久の乱で千葉一族を代表

西国に所領獲得 ただし、宝治合戦(1247)により木内氏没落

⇒ a. 千葉道源の俗名は千葉氏一族木内氏分流の小見四郎左衛門尉胤直

b. 了行と同様に京都の権門と関係を結んだ

西園寺家との関係は千葉介の介在によるか

c. 大陸に渡って経典を将来

木内氏の在京活動 胤頼以来の関係

胤朝→下総守(1222) 胤家→左衛門尉(1231)

承久の乱の恩賞として西国所領獲得 大和国宇野庄、淡路国筑佐庄・由良庄

d. 六波羅に那蘭陀寺を開く

『拈拾集』『唐本一切経事』

一当山一切経蔵安置唐本青表紙御経事

右唐本者、千葉道源房云僧、発一切経将来之願、申綸旨渡唐、渡二部一切経之処、或時起難風、俄及唐船漂没、雖投船中之財宝、風不息、爰彼一切経一部沈時、浪風如元静畢、船中諸人云、此一切経深龍神望給処也、不及猶預、可被沈之一同、爰道眼房云、依 綸言所渡申者也、縦波浪没不可叶^云、則風息畢、以此御経可爾靈場為奉納^云、其時不知当山此子細、其後彼仁、洛陽東山六波羅蜜寺南、燒野云所建立一寺、称那羅陀寺、奉納彼寺、其後当山東坂本和氣大学介籌策漸々寄進、当寺之分二千余卷也、爰道源房円寂、其後大学介又死去、彼弟子僧等、一部二部取散、三千余卷空散失畢、当山観実房猷秀僧都雖廻諸方計略、本寺无正躰之上、元弘已来動乱相続之間、不及是非、又黄 表紙唐本在之、施入人不知之、此内百卷広瀬被取之^矣、修乗坊春尊堅者、夏講一和尚時、唐本書本 撰分、造棚改箱致興行、夏講中一切輕誦、此時始之、為払虫也、

(捨て仮名・送り仮名・返り点は省略。『拈拾集』は鎌倉後期の播磨書写山の学僧が編纂。

『兵庫県史 史料編四』収録)

e. 兼好法師と親交

『徒然草』第百七十九段

入宋の沙門、道眼上人、一切経を持来して、六波羅のあたり、やけのといふ所に安置して、ことに首楞嚴経を講じて、那蘭陀寺と号す。其聖の申されしは、「那蘭陀寺は、大門、北向也と、江帥の説とて言ひ伝へたれど、西域伝、法頭伝などにも

見えず、更に所見なし。江帥はいかなる才学にてか申されけん、おぼつかなし。
唐土の西明寺は、北向勿論也」と申しき。

6 千葉氏研究の課題

列島・東アジア的視野の中で地域を理解する姿勢・・・在京活動・遠隔地所領の支配
一次史料の活用・・・日蓮遺文紙背文書 記録（公家日記） 近世成立の典籍類→批判的活用
中世考古学・国文学・美術史・宗教史・建築史などとの連携
→中世都市千葉の空間構造 千葉寺の文化環境
市民的な問題意識→ 事大主義的・悪しき顕彰史観からの脱却
領主制論的東国武士認識(在地主義)→更なる克服の必要 グローバルな存在としての認識

⇒ 真の地域振興とは、そこに住む人々がその地域の歴史や伝統を知る事によって、ここに住んでよかったと心の底が思えるような「まち」を自分たちの手で作っていくこと。経済効果の前提として、人々が、自らの暮らす地域に対する誇りや、経済的利潤では購えない充足感、いわば「心の福祉」のようなものが、まず実現されるべき（東川由佳・野口実「歴史資産を活用した観光と地域振興に関する諸問題－「景観」と「地域史」理解を中心に－」京都女子大学宗教・文化研究所ゼミナール『紫苑』第14号、2016年）

【本講演の前提となる主な拙編著・論文】

『坂東武士団の成立と発展』戎光祥出版、2013年、初出 1982年／『中世東国武士団の研究』高科書店、1994年／『源氏と坂東武士』吉川弘文館／2007年／「閑院内裏と『武家』」『古代文化』59－3、2007年／「東国武士の在京活動と入宋・渡元」『鎌倉遺文研究』第25号、2010／「鎌倉時代における下総千葉寺由縁の学僧たちの活動」京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』第24号／『武門源氏の血脈』中央公論新社、2012年／『東国武士と京都』同成社、2015年／「執権体制下の三浦氏」峰岸純夫編『三浦氏の研究』名著出版、2008年、初出 1983年／『千葉氏の研究』名著出版 2000年、初出 1998年／「了行の周辺」『東方学報』第73冊、2001年／「慈光寺本『承久記』の史料的評価に関する一考察」京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』第18号、2005年／「三浦氏と京都」『三浦一族研究』第10号、2006年／「千葉氏系図の中の上総氏」峰岸純夫ほか編『中世武家系図の史料論 上巻』高志書院、2007年

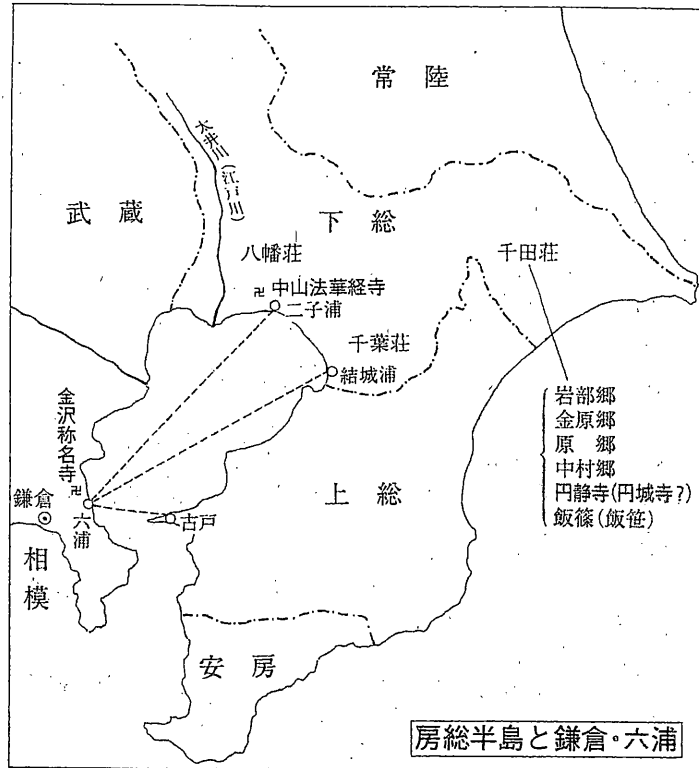
《資料》

A. 千葉庄内における聖教の刊刻・書写と奉授 (鎌倉時代)

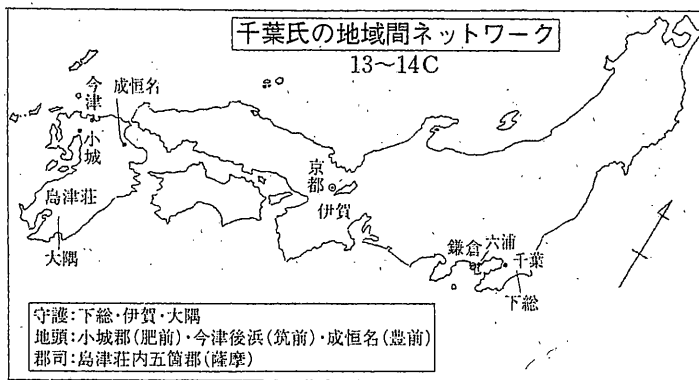
聖教	僧	場所	年	刊・写・授
佛説如意虚空蔵菩薩陀羅尼經	道忍	(下総国千葉庄堀籠住人)	文永十一年(一二七四)	刊
不動法	釵阿	下州千葉之庄大日堂知客寮	弘安七年(一二八四)	写
荒神供次第	榮賢	下州千葉大日堂長老坊	永仁五年(一二九七)	写
大聖歡喜天儀軌、唐不空訳	榮賢	下州千葉大日堂	正安三年(一三〇一)	写
諸尊秘決	榮賢	下州千葉大日堂長老坊小坊	正安三年(一三〇一)	写
法華玄義私見聞	心慶	千葉之大日堂	応長二年(一三一二)	写
三代別記	秀範	千葉庄堀内禅室	正和元年(一三一二)	授
	聖海	千葉庄堀内禅室	元亨二年(一三二二)	授
	恵劔	千葉庄堀内光明院	暦応元年(一三三八)	授
天台四教義私記	心慶	千葉琰魔堂庵室	文保三年(一三一九)	写
中天集	心慶	琰魔堂庵室	元応二年(一三二〇)	写
対法蔵頌疏抄(第七卷・十二卷)	源山	千葉庄閻魔堂別室	元亨二年(一三二二)	写
(第二十一卷)	源山	下総国千葉庄閻魔堂別院	元亨二年(一三二二)	写
見聞集	心慶	千葉琰魔堂庵室	元亨二年(一三二二)	写
〔十不二門〕指要証義抄	心慶	(執筆千葉寺住浄意房)	元亨二年(一三二二)	写
明静類聚抄	源山	下総国千葉庄池田郷横須賀 閻魔堂別院	元亨二年(一三二二)	写
自受用所居事	心慶	下州千葉庄閻魔堂別院	元亨二年(一三二二)	写(筆師源山)
止観大綱鈔	心慶	(筆師千葉寺住浄意房)	元亨二年(一三二二)	写
持誦	源山	下州千葉大日堂南面	元亨二年(一三二二)	写
題未詳(不完冊子 五)	心慶	(執筆千葉寺住浄意房)	元亨二年(一三二二)	写
俱舍論頌疏見聞	源山	千葉庄堀田柴崎田嶋	元亨二年(一三二二)	写

〔小笠原長和「武州金沢称名寺と房総の諸寺」(同『中世房総の政治と文化』吉川弘文館、一九八五年十一月、初出は一九五九年三月)・高橋秀栄「天台僧心慶・源山の手沢本」(『金沢文庫研究』第三〇九号、二〇〇二年一月)によって作成]

B.



C.



D.

千葉氏の地域間ネットワーク

